

平成11年度 香小研国語部会

研究テーマ

豊かな言語の力に支えられて生き生きと自己を表現する国語教室

1 テーマ設定の背景

今、学校教育に強く求められているものの一つに、「生きる力」の育成がある。「生きる力」とは、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力」「他者を思いやる心や感動する心等の豊かな人間性」「たくましく生きるための健康や体力」を培うことにより育成されるものと中教審第1次答申では述べられている。これまでもそれぞれの国語教室では、学習指導要領に明記されている「国語を正確に理解し適切に表現する能力を育てるとともに、思考力・想像力及び言語感覚を養い、国語に関する関心を深め国語を尊重する態度を育てる」ことを目標として、さまざまな授業改善に努力してきてはいるが、生きる力の育成という視点で見直すならば、さらにどのような方向で授業改善を進めて行くべきであろうか。

これまでの私たちの努力にもかかわらず、現代を生きる子どもたちの言語生活を見つめたとき、手紙一本が書けない、挨拶ができない、ことばが乱れている等がよく指摘される。これらは、単に言語生活における問題だけにとどまらず、自己表現の稚拙さや人間関係の希薄化を作り出し、心の荒廃を生み出している。

このような子どもたちに、心豊かな人間を育成することと表裏一体の関係にある言語の教育としての立場を持つ、国語科の果たす役割は大きい。

これからの国語教室では、豊かな言語の力を培いながら、自己表現力やコミュニケーション能力を育むことが重要となってくる。すなわち、確かさを包含した豊かな言語の力を糧に、自己・他者・学習材との対話を活性化して、自己理解・他者理解を深めながら、自立と共生の心を育み、「生きる力」が育成されていくものと考えるのである。

このようなことをふまえ、香小研国語部会では、昨年度に引き続き、

豊かな言語の力に支えられて生き生きと自己を表現する国語教室

をテーマとし、研究を進めていくこととしたい。

2 テーマについて

テーマについては、以下のように捉えている。

○ 「豊かな言語の力」とは

相手、目的、場面や状況に応じて、「話す・聞く・書く・読む」という一連の言語活動を、正確で適切なことばを使って行う能力である。具体的には、以下のような能力である。

- ・ 文字・音声等の言語媒体を活用し、自己の内面を状況に応じて適切に表現する能力
- ・ 文字・音声で表された言語の内容や表現を、読解や聴取などを通して正確に理解する能力
- ・ 言語を媒体として自己の思いを表出し、伝達し合うコミュニケーション能力
- ・ 自己の生活経験や感性を基盤に、言語を媒体として、思考・想像・判断を行う能力

○ 「生き生きと自己を表現する」とは

自己の思いや願い・考えなどを目的や状況に応じて、主体的に文字言語や音声言語で豊かに表現することをいう。この過程で、子どもは、必然的に思考力や想像力、言語感覚を磨き上げていくことになる。

○ 「国語教室」で豊かな言語の力を培っていくことは

心豊かな人間づくりに大きく寄与するものである。我々国語教師は、教科の学習指導のみに留まらず、自らの教室の子どもに言語の力を培っていくことで、個性豊かな人間づくりに大きく関与しているのである。

3 新指導要領とテーマとの関連

昨年12月14日に告示された2002年より実施される新学習指導要領でも以下の目標が掲げられている。

(目標)

国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力及び言語感覚を養い、国語に対する関心を深め国語を尊重する態度を育てる。

この目標がこれまでと異なっているのは、「伝え合う力」が新たに加わっていること、また、「適切に表現」と「正確に理解」の順序が入れ替わっていることである。

また、改訂の具体的な点をあげてみると、以下の通りである。

目標が、「1・2年」「3・4年」「5・6年」まとめて示されている。

内容が3領域(話すこと・聞くこと、書くこと、読むこと)1事項(言語事項)に改訂されている。

内容A・<話すこと・聞くこと>に、「話し合うこと」が新設されている。

内容B・<書くこと>に、「相手意識」「目的意識」「自分の考えを明確に」が強調されている。

内容C・<読むこと>に、最初に読書が新設されている。また、「人物の心情を読むこと」は、高学年の重点事項となっている。

内容の取り扱いでは、低中高ごとに、具体的な活動例が示され、これを参考に実践的な指導の充実を図ることが求められている。

言語事項の項目に、漢字は、読みが当該学年で、書きは一学年上の学年までの二年間で習得するように示されている。

指導計画の作成と各学年にわたる内容の取り扱いでは、学校図書館の計画的な利用、音声言語指導についての授業時数が提示、作文、毛筆指導の配当時数の削減等が示されている。

ここには、基礎的・基本的な言語能力の育成を基盤にして、音声言語・文字言語を媒体とする自己表現力及び他者とのコミュニケーション能力、読書に親しむ態度の育成、情報収集・選択・伝達能力の育成等の充実が求められている。

本テーマの研究をより一層進めていくことで、これらに対応する授業の方向性が明らかになっていくものと考えられる。

4 授業改善の視点

本研究テーマの具現化に向けて、昨年度は、下記に示す3つの授業改善の視点を基に、授業実践を積み重ねてきた。

<昨年度の視点>

<視点1>

子どもが自らの力で思考・表現し行動する過程で、表現力・理解力の基礎的・基本的な内容の確実な定着を図る。

<視点2>

子どもが生き生きと自己の読みや思いを表現するために、他教科との関連を図ったり「話す・聞く・書く・読む」の言語活動を総合的に展開したりするような単元の構成を工夫する。

<視点3>

一人一人の個性を生かすために、個々の子どもの学習スタイルに応じた活動の多様化を図ったり、学校図書館・情報機器の効果的な活用を工夫したりする。

それぞれの郡市の協力により、それなりの充実した成果が得られた。昨年度の視点を継続する方向も考えられるが、新指導要領案が告示された今、私たちが明確にしていかなければならない授業改善の視点がより具体的になってきたと考える。そこで、より一層国語科で培うべき基礎的・基本的な力を明らかにしながらも、本年度は、以下のような視点から研究を試みたい。

<本年度の視点>

<視点1>

論理的思考力・情報活用能力の育成等に関連づけて、説明的文章の指導をどう改善していくか。

<視点2>

伝え合う力（話し合う・聞き合う・書き合う）を目的とする指導は、どのような方法があるか。

<視点3>

読書に親しむ態度の育成等と関連づけて、これまで詳細に偏りがちであった文学的文章の指導をどう改善していくか。

4 授業改善の視点

昨年度の授業改善の視点は、支援の工夫に重きを置き、幅広く多様な実践の可能性を生み出そうとするものであった。夏季研修会においても多様な実践の紹介が行われ、充実した成果が得られた。しかし、実践の紹介に止まり、こういう場合はこういう支援が望ましいというような共通の方向性を見出すことはできにくかったように思われる。

本年度は、新学習指導要領が告示され、私たちが明確にしていかなければならない授業改善の視点がより具体的になってきた。そこで、以下のような視点を設定し、「何のために」、「何を」を用いる学習をどのように改善していくのかという共通項を定め、具体的な授業改善の方向性を、会員の議論によって見出していけるような実践研究にしたい。

< 視点 1 >

読書に親しむ態度の育成等と関連づけて、これまで詳細に偏りがちであった文学的文章の指導をどう改善していくか。

「何のために」

- ・生き生きと自己を表現する
- ・読書に親しむ態度
- ・各学年の「読むこと」の内容
- ・豊かに想像する力

「何を」用いて

- ・文学的文章
(各提案)

「どのように」

- ・詳細な読解を克服して
- ・他の領域、教科と関連させて
- ・発信も含めて
(各提案)

< 視点 2 >

論理的思考力・情報活用能力の育成等と関連づけて、説明的文章の指導をどう改善していくか。

「何のために」

- ・生き生きと自己を表現する
- ・論理的思考力
- ・情報活用能力
- ・各学年の「読むこと」の内容

「何を」用いて

- ・説明的文章
(各提案)

「どのように」

- ・詳細な読解を克服して
- ・他の領域、教科と関連させて
- ・発信も含めて
(各提案)

< 視点 3 >

伝え合う力（話し合う・聞き合う・書き合う）を目的とする指導は、どのような方法があるか。

「何のために」

- ・生き生きと自己を表現する
- ・伝え合う力
- ・各学年の「聞くこと・話すこと」「書くこと」の内容

「何を」用いて

- ・教科書には学習材は載っていない。
(各提案)

「どのように」

- ・相手、目的、状況を明確にして
(各提案)

用語の定義

「論理的思考力」とは

- ・ ある前提条件に基づいて推理を行い、一定の帰結を得るような思考のことを論理的思考という。例 三段論法（「国語教育研究大辞典」より）
- ・ 関係把握力，関係認識力のことである。
- ・ 対比，選択，因果，総合，包括，要約，敷衍といった特性がある。
- ・ 比較，分析，体系化と一般化，推理・推測，批判的思考という要素がある。
- ・ 国語科で使うとき，「論理的表現力」まで含めて使うことが多い。

「情報活用能力」とは

「伝え合う力」とは